但馬に牛を 前田周助

今から、およそ二百年ほど前の話です。

小代村（今の香美町小代区）の牛かいの家に、周助という、それはそれは牛が好きで男の子がおりました。牛を連れ出して遊ぶことが何よりの楽しみで、朝からばんまで牛の世話をしすごしました。日がくれても帰ってこない周助を心配した家族がさがしに行くと、牛のはらのわきでよりそうようにねむっている、そんなこともしばしばでしたので、村人は周助を「牛かいぼうず」とよびました。

「牛は正直で、本当にかわいいもんだなあ。おいらは牛という時が一番幸せだなあ。」

周助には牛の気持ちが手に取るようにわかりました。牛たちもまた、周助の前ではおとなしく、よく言うことを聞きました。周助にとって牛は心が通じ合う友達でした。

やがて立派な青年に成長した周助は、うでのいい牛かいになっていました。人一倍の愛じょうをかけて育てている周助の牛は、それは見事な美しさでした。だれにも負けない「良い牛を見極める目」を持っていた周助は、村から村へと良い牛をさがしては買い求め、たん念にし育てて良い子ど

もを産ませました。周助が産ませる子牛のすばらしさには村人もおどろき、特別に名前をつけて「周助牛」とよんでいたほどでした。

しかしその一方で、周助の家族はこまり果てていました。良い牛を見つけると、どうしてもほしくなる周助です。どれだけお金があっても足りません。ふつうであれば、十分にゆう福な生活ができたはずの前田家のし産は、みるみるうちに少なくなっていきました。当時の小代村では、牛は農耕のための道具にすぎませんでした。牛かいは、良い体をした美しい牛よりも、がんじょうで気しようのおとなしい牛を育てればそれでよかったです。家のお金を次から次へと牛にかえてしまいう周助に、家族はもう反発しましたが、周助の良い牛への思いは強くなるばかりでした。

二十六才になった周助は、初めて但馬を出ました。自分が育てた四頭の子牛「周助牛」を大阪の河内牛市場に売りに出してみることにしたのです。何日もかけて牛とともに歩き、おとずれた河内牛市場は、ごった返すような人だかりとけい験したことのない活気にあふれていました。見るものすべてにあつとうされるばかりの周助でしたが、その中で周助牛は、その日一番の高いひょうかを受け、大人気となったのです。

「おい、あれはこの牛だ。すごく美しい牛じゃないか。」

「体はひきしまっているし、肉づきもいい。何よりも顔がりりしいのう。」

「おい、次もまた来てくれよな。ぜっ対だぞ！」

そんな声があちこちから聞こえてきました。うれしさのあまり、周助は飛び上がりたような気分でした。

「子牛がこんなねだんで売れるなら、このまま家族で大阪に引っこせば楽なくらいができるじゃないか。これ以上、良い牛をさがさなくても、このままで十分くらいしていけるんじゃないか。」
そんなことが、牛が売れて有ちよう天になった周助の頭をよぎっていました。

子牛を置いて一人で帰る長い道のりの中で、来るときには気がつかなかった風景に、周助は考えさせられていました。広大な農地や二毛作ができるかんきょうは、但馬にはありません。果てしなく続く金色の田んぼの美しさも、周助のふるさとはありませんでした。

但馬に入るとうげで足を止め、こきょうの方角を見わたしました。そこには高く急な山や面山がたくさんならば、その谷ごとに小さな村々がぼつんぽつんと点のように見えています。いな作にはてきさないその土地が、周助に助けを求めているかのようでした。

「わがふるさとに何ができようか……。この土地に何かがあるというのだ。牛しかないではないか。牛を農ここの道具とし、牛の改良に気がつかず、牛よりもお金の方が大切と言う。とんでもない考えちがいだ。但馬はどこよりも良い天下一の牛を出さねばならない。それしかないのだ。」
冷静さを取りもどした周助は、ゆめからさめたようにつぶやきました。

「わたしが大阪に行くわけにはいかないのだ。」

周助の良い牛を求めて村から村へと歩きまわる日々がふたたび始まりました。

「良い牛を数頭売つてもただそれだけの利えきではないか。わたしの目標は、金もうけをすることではない。わたしはここ小代村に、名牛を後々まで伝え残したいのだ。それには最高の牛を選び出してその血すじをみちびき、ふやさなければならぬ。」

もう何のまよいもありませんでした。周助の強い信念は、家族はもちろん、村人にも伝わり、多くの農家が周助から牛をもらい受けて周助牛をし育てるようになりました。

一八五〇年、ついに周助のすべての思いがこめられた一頭の牛がたん生しました。その牛こそが、今に伝わる但馬の名産、但馬牛のもとであり、松坂牛など数多くの有名な牛のもととなった「周助つる」だったのです。周助はこのとき五十二才。大阪への旅路から、二十五年以上の年月がすぎて

いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。